



開催されました



## 全国学校飼育動物研究大会が開催されました

去る、平成 28 年 8 月 28 日（日曜日）、東京大学・弥生講堂一条ホールにて「命の大切さを実感する学校飼育動物」を大会テーマとして、第 18 回全国学校飼育動物研究大会が開催されました。

文部科学省の関係者のご列席も賜り、日本全国から多くの関係者が参加され、特別講演、最近の研究結果、実践例報告などが行われました。特に、文部科学省の方のお話で、動物との関わりを多くの教科で取り入れていく取り組み、実証研究などが、文部科学省・有識者委員会内でも行われていることに、希望を感じることとなりました。

## 忠犬ハチ公のちょっと、もっと深い話：



昨年建立された東大の上野博士とハチ公像

JR 渋谷駅の忠犬ハチ公像は、待ち合わせのランドマークとして有名ですが、東京大学がハチ公とゆかりがあることはあまり知られていないことです。

実は、このハチ公の飼い主さんは上野栄三郎博士（1872 - 1925）という方で、東京帝国大学・農学部（現、東京大学農学部）の教授をされた方でした。上野博士は、ハチを飼い始めてから一年半後に急逝されました。実際にハチと過ごしたのはたった一年半だけだったのです。

「ハチ公」の呼び名は、ハチという呼び名を学生さんたちが呼び捨てにするのをはばかり、「ハチ公」とよぶようになったことからだとされています。この「公」は、「ポリ公（警察官に対して）」のように、侮蔑的にも使われますが、元々は、「家康公」のように、身分の高い人の呼び名に付けたり、「熊公」のように動物への親睦の呼び方としても使われていたようです。

ハチ公は、上野博士の没後、別の飼い主さんの元に引き取られましたが、その後も亡くなるまでの 10 年間、朝、夕と渋谷駅に通ったとのこと。

ハチの剥製（はくせい）が国立博物館にあることは有名ですが、ハチの内臓（ホルマリン保存）が東大にあることはあまり知られていません。ハチの死因も以前はフィラリア症だとされていましたが、心臓から腫瘍細胞が確認され、心臓腫瘍が死因と最近確認されました。

上野博士の目線からのハチ





### 根拠に元づく学校動物飼育

今年の研究大会発表から

#### ➤ 小学校特別支援学級における飼育の実態と教員の意識調査（兵庫教育大学大学院・宇崎貴雄）右図

特別支援学級においては、「命の教育」よりも「思いやり」や「責任感」を培うことにねらいがある傾向が伺える。

「人間関係の改善」や「通常学級児童との交流が増えた」などの、本来の動物飼育のねらい以外の効果が観察され、「人と動物のきずなを育む効果のみならず、動物を介して“人と人のきずな”を育む効果」が教員において実感されている。

#### ➤ 動物飼育で育つ子供の資質・能力（筑波大学付属小学校・鷺見辰己）

低学年から育てていきたい資質能力の一つ「相手の気持ちを考えることができる」は、愛情、思いやり、優しさの根底にあり、その後の、想像力、コミュニケーション力を育てることにつながる資質能力である。

この能力の成長がみられるのは、「二年生が一年生に動物の抱き方を教える」、「上の学年の子供が下の学年の子供にお世話の仕方を教える」場面であったり、「掃除当番を忘れ、他の子供から責められたり、それを改善することに関する話し合い」の場面、「クラス替えに伴う今後の飼育体制の話し合い」の場面、「死」に直面した場面であるように観察される。

#### ➤ 学校飼育動物を活用した実践報告（福岡市立飯倉中央小学校・八木良子）右図

一年生：生活科、飼育活動

学校たんけんで飼育舎をのぞいてから動物に興味を持ち、自分たちもお世話をしたいと言い出し、上級生と一緒に参加するようになった。授業では、観察する⇒抱っこする⇒心音を聞く活動を通して、動物の重さ、むくもり、心音などを五感を使って得た感想を記録することを続けた。

四年生～六年生：「季節と生き物」（四年生）、「命のつながり」（五年生）、「体のつくりとはたらき」（六年生）、飼育活動

どの学年でも動物と実際に触れ合うことで関心を持ち、観察する様子も真剣で、記録の絵も写実的になっていき、表現力が増したように観察された。

#### ➤ 農業高校の挑戦—学校飼育動物を広げるために—（大阪府立農芸高等学校 ふれあい動物部）右図

学校で飼育しているウサギやモルモットを使っての動物介在ふれあい活動を、年間で30回以上行っている。幼稚園での活動の最中、園児がマウスの動きを止めるために、足で踏んづけて止めようとし、マウスが死亡する出来事があった。園児が「リセットボタン押したらええやん」と言ったことに衝撃を受けた経験を紹介。

また、小学校の教員に対する聞き取り調査を実施し、「動物飼育が未経験であることの不安がある」、「仕事が多忙で児童たちにまかせっきりになり、児童や動物とあまり関われない」などの問題点を見付けることができた。

### 特別講演：「ひとと動物の絆の心理学」（大手前大学・中島由佳）から

以前の研究から、学校での動物飼育が子どもに良い影響があることは実証されている。最近の授業の評価法が、全体的な評価法から、個々のパーソナリティーを考慮した評価法に関心が移る中、学校動物飼育の効果の評価も個々のケースにおける検証が必要になって来ている。その中で、「不適切飼育とされていたケースでも良い効果があるのでは？」、「適切飼育とされていたケースでも、悪い効果のケースがあるのでは？」や「ザリガニではどうか？」などの、次の課題が明らかになってきた。

